

\*アンケート、ご協力ありがとうございました。まだの方は今日、お願いいたします。

### ワンポイント

① **トランプ関税に対して、石破首相「日本が自由貿易の主導を」**。これに立民は「国難に対して挙国一致で」と同調の構えを示す。かつて2000年の TPP・環太平洋パートナーシップでは「日本の農業をまもれ」と大反対をした革新左翼はどうかじ取りー貿易の「公正(正義)」ーを示すか、大変難しい局面を迎えている。

② **「労働価値説」を AI はどう説明するか？**

A・スミス、リカード、マルクスの名前を挙げ、基本概念をほぼ無難に解答し、よくできている。しかし細かく見れば、物足りない点は否めない。

(例)「**搾取(剰余価値)は、労働の価値と賃金の差。**」とある。しかし、労働の価値といういい方では、イコール賃金となる。「労基法」11条には「賃金は提供した**労働の対価報酬**」とある。(同一労働同一賃金の考え方。)労働の価値ではなく、**正確に労働力の価値とするべき**。民主青年同盟オンラインゼミ(5月10日)では、そこが正しく説明されていたが、労働力の価値とは、労働力の再生産費との説明が必要。

労働価値説は一般には、ほとんど知る機会がない。学校教育、社会で取り上げられるのは効用価値説一辺倒である。若い人たちには、労働価値説に触れて、労働をないがしろにする社会を変える力をはぐくんでほしい。

### 第19章 対象についての従来の叙述

#### 第2節 アダム・スミス

##### スミスのドグマ

・スミスは「すべての商品の価格、したがって年々の総生産物の価格も賃金、利潤、地代に分かれなければならない。さらに理不尽に、賃金、利潤、地代から構成される。」という。

これは、① **不変資本 c 部分の看過、だから、 $w=v+m$ への分解**

② **可変資本vの収入への解消 (資本一収入)という問題点を含む。**

① は、スミスは労働の二重性の把握がないので説明できず、c 部分の生産物は過去の労働によってつくられていることで説明しようとした。マルクスは、c の使用価値を有用労働で新しい使用価値に作り変えることによって c の価値をその生産物に維持・再現し、その同じ労働の人間労働の面で新しい価値(v+m)をつくる、と説明した。

(しかし、スミスの方法は、価値は労働のみが作るという深い考え方に裏付けられている。マルクスはそこを高く評価した。)

② 正しくは、労働者の労働力は商品として売られ、受け取る貨幣は労働者の収入になる。売られた労働力は資本家の手もとで可変資本・v として生産過程で使用される。(資本循

環：貨幣資本→生産資本） スミスの「資本→収入」把握は、「価値の自立」の理解がない。

総括(最晩年の到達):「商品価値が三収入から構成されるというばかげた定式も、そしてその根拠をなすかのような、三収入に分解されるというヨリもっともらしい定式も、ともに誤っている。」

◎分解と構成は同じことではない。

マルクスは、このことを、直線を用いて説明している。一本の定まった長さの直線を三つに分けたのち、またつなげば、その長さは元の長さと同じ。一方、ある任意の長さの三つの直線をつないでも、三つの任意の長さの合計でしかない。それと同じことで、剰余価値の大きさが賃金・利潤・地代の大きさを決めるのであり、賃金・利潤・地代が剰余価値の大きさを決めるのではない。

◎分解も誤り。(マルクスは、はじめ分解は正しいとした。)

一本の直線を分けても、その線分は直線であり、曲線にはならない。本質は変わらない。資本価値は収入に分解しない。商品価値はそれ以上のものに分解しない。(価値の自立)

スミス後の経済学者たち 結論:ドグマは経済学の正統派信条をなして、今日まで受け継がれている。(例) ①GDP は、 $c$ を抜かした1年の価値生産物 $=v+m$ 。生産物価値を価値生産物としたスミスのドグマ。 ②労働分配率 $-w$ が賃金と剰余価値とに分解=分配

1970年代ドグマ論争 (コップの中の嵐であった)

論争とは、 $c$ の価値を過去にさかのぼらせ、 $v$ と $m$ に分解できるか? ①分解手続きができる・数学的に証明できる。②分解手続き不可能。③極小部分は近似値とする。—(スミスの立場)。マルクスは、「労働の二重性」で $c$ 価値の移転を説明している。その把握を前提にしない論争は、どんなに激しくても無意味。その無意味さは「コップの中の嵐」。過去にさかのぼることの誤りは「ゼノンのパラドックス」と同じ。

【アキレスと亀】足の速いアキレスは、前に行く、のろい亀に永遠に追いつくことはできない。アキレスが前にいた亀の地点につくと、そのとき亀は少し前にいる。これを永遠に繰り返す。現実には、追いつくことはできる。これは過去の地点への到達を問題にする誤り。

【資本論と草稿集】第1草稿:『第1巻』は徹底的に推敲され刊行。『第2巻』は最晩年の第8草稿まで書き改められる。『第3巻』は手つかずのまま出版。

第16章「可変資本の回転」は第2草稿(これを基礎にするべきとマルクス)。第2節「個別可変資本の回転」で、スミスの「資本—収入」把握の影響が散見される。第19章「対象についての従来記述」は、最晩年、第8草稿。スミスのドグマ克服の草稿であるが、「資本—収入」把握の名残を感じさせる記述がまだある。新版605頁、真ん中「資本家の資本は…労働者の手中で収入として機能する」—資本(誤)→貨幣(正)とするべき—など。

金つなぎ:エンゲルスは後のマルクスの文章(第8草稿)をとところどころに入れ替えて挿入。